

Ⅰ 現代日本文学における家庭把握と故郷希求

郡山女大家政 ○東船均 関口富左 須田秀幸 高館作夫 影山弥

目的 日本の近代文学は家族制国家主義の下で「家」に対する反抗から始まり、「家」は旧道德、旧社会そのものとして人間性を抑圧した。そして「家」への反抗は「国家」への反抗に通じていった。しかし敗戦にともない家族制国家主義が崩壊するに至り、従来の「家」は崩壊し、新たな「家庭」が生まれた。父の権威の失墜に対して、母がクローズアップされることになるのである。現代文化は「第三の新人」の文学を中心として、家庭における母と子の関係を核にしその様相を浮きぼりにする。現代文学を通して、現代の家庭を把握し現代人の故郷喪失に対する一方の精神状況である故郷希求を指摘する。

方法 日本文学史上「第三の新人」と分類されている文学を中心に観る。

成果 現代人は、家庭において父性、母性を喪失し個人になることが達成すべき理想ではなく、引受けねばならぬ苛酷な現実に置き去られている。現代文学は「家庭」を否定していよう。しかし我々現代人はその内にあって生きる安らぎの場である故郷を強く希求しているのではなかろうか。